

2021年度 発達科学研究所第2回公開研究会報告

チーム学校を考える

～スクールカウンセラーとスクールソーシャルワーカーとの連携・協力による支援～

熊坂 聡¹

1. 開催趣旨

学校現場では、いじめ、不登校、暴力行為、児童虐待、生徒の心の問題、発達上の課題など指導上の様々な課題が存在する。学校の先生方はスクールカウンセラー（以下「SC」）とスクールソーシャルワーカー（以下「SSW」）と連携・協力して支援することが必要な時代となった。そこで、本研究ではSCとSSWと学校の先生方がどのように連携・協力してチーム学校を構築していけばよいかを考える。

2. 公開研究会の概要

(1) 日 時 2021年2月12日(土) 13:00～15:30

(2) 主 催 宮城学院女子大学発達科学研究所

(3) 参加者 本学教員、宮城県内学校関係者、本学卒業生、本学学生、その他

(4) 内 容

①基調報告 SCとSSWの業務状況、活動内容、連携・協力の実際についての報告

②コメントと質疑 本学の心理学・社会福祉学・教育学を専門とする教員からのコメントと質疑によりその機能について理解を深め、連携と協力による支援のあり方考える。

(5) 報告者

尾上豊明氏

SC、仙台市教育局、東北学院大学学生相談室
藤田志津氏

SSW、宮城県東部教育事務所、美里町教育委員会、
気仙沼市教育委員会、宮城県高等学校

(6) コメンテーター

松浦光和（本学教育学科特任教授、臨床心理学）
竹田幸正（本学教育学科特命教授、教育学）

松原弘子（本学教育学科准教授、社会福祉学）

(7) 開催方法 オンライン方式（ZOOM）

(8) 倫理的配慮 本公開研究会の内容については各氏に『宮城学院女子大学発達科学研究』に掲載することについて了解を得、その報告書内容については、各氏に原稿を確認・修正いただき掲載している。

3. 基調報告とコメント

基調報告にコメントが有意に関連しているので、基調報告の要旨と共にコメンテーターからのコメント及び質疑を合わせて報告する。

(1) 尾上豊明氏の基調報告とコメント

尾上：「スクールカウンセラー」は、心理の専門家と言われますが、私は「主観に注目する専門家」だと考えています。児童生徒が安全に成長して育っていけるようにというのは、学校にいる人間、チーム学校としては全員が望むところです。ただ、同じ目標を持ちながら違う役割を担います。連携の仕方について少し触れておきます。文部科学省からのマニュアルでも、互いに連携をしましょう、役割をお互いに理解していきましょうとあり、実際進められていると思います。しかし、具体的にどういことが連携になるのか、どうやったらいいのかというのは、実は、長く、学校現場の皆にとってテーマとなっています。ここから、実際の体験に近い仮想事例を紹介します。一つ目は、保健室によく来て話をする高校生のAさんです。家族、友だち、アルバイトなど、何かと辛い、困ったという話をしていました。保健室のB先生は「そんなに悩みがいっぱいあるんだったら、一回、SCの先生に話してみたら」と勧めました。Aさんは、「いや、でもね」とあんまり芳しくない反応をするのです。こういったことを

SCは、B先生から聞いていました。ここで、SCとB先生が話をします。SCが「どういうことで抵抗感みたいなのが生まれているんでしょうね」と聞くと、B先生は「どうもAさんは、何か説教されるんじゃないか、言われちゃうんじゃないかという警戒心が結構あるようだ」ということでした。保健室の中で、ちょっと話すぐらいだったらいいんですけども、話が大きく広げられてしまうのではないかと、Aは心配しているのです。そこで、B先生とある作戦を立てました。それは、『とりあえず、アルバイト先で困っていることについて、あのSCさんはいかようなアイデアを持っているかもしれないよ。』と促してもらうというものです。そのような提案をしていただいて、実際につながりました。2つ目は、担任の先生が怖いけれども本当は話したいという子の例です。担任のE先生は、実際は遠慮しないで何でも言ってきてほしいと考える、優しい先生です。この様子を知ったSCはいきなりE先生が接近するよりもちょっと怖い感覚が減って、少し話せてというのを繰り返して、近づくことができた方がいいのではと考え、先生方と打ち合わせをしました。どうしたかという、この子の近くで、前年の担任のF先生とか、保健室の先生とか、SCも含めて、担任のE先生のうわさ話をしました。どういううわさ話をするかは、E先生に了解を得ていて、実は飼い猫が大好きな先生で、職員室の机にもかわいい猫ちゃんの写真が置いてあるという話をしました。結果的には、その子は先生が怖いような気がしたけれども大丈夫だったという経験を基に、どんどん話ができるようになっていきました。3つ目は、H君という落ち着きのない小学生です。物を壊し、友だちとのけんかも多い子でした。担任のJ先生はH君のお母さんに、H君が物を壊したり、けんかしてけがをさせてしまったりすると連絡せざるを得ないのです。お母さんはいつも、「すみません、本当にすみません」という感じでした。お母さんも本当に何とかしようと思っているのです。そこに、先生から連絡が入るとお母さんからは「すみません」という言葉がどうしても

出てきてしまう。担任がSCを勧めても、あんまり乗り気ではありませんでした。お母さんももちろん困ってはいるわけです。しかし、その困り感を上回って、申し訳なさがあるということがだんだん見えてきました。お母さんの気持ちが、H君にではなくて、周りの子どもや担任に対して向いていたのです。担任とお母さんとで目標がずれていました。これを何とかするために、J先生は「お母さん、私も困っているので、一緒にSCの先生に相談しに行きませんか。」と誘いました。この取り組みは、お母さんがまず相談という場に来られること、チームとしてお互いに意見を言い合えるという状況を作ることが目標でした。この後、学校の中では、この子を支える会議があったのですが、J先生はもちろん、SC、お母さんも参加して、今後の対応と一緒に検討する会議ができるようになりました。誰かを責める会議にならないということが、意義深かったと思います。4つ目は、中学生Kさんの例です。この子は、地域の期待が大きく、地域にとって貴重な存在でした。この子には、周囲の期待に応えたいという気持ちと、この地域から外に出て自分の夢を叶えたいという気持ちがありました。Kさんはいつのまにか、自分が外に出てやってみたいという気持ちを出せなくなっていました。そして段々気力がなくなり、学校にもあまり足が向かなくなっていました。SCが実際に話を聞くと、やはり、地域の希望として頑張りたいという話と、外に出たいという話の両方が出てきました。SCとしては、将来地域を出ていきたいという気持ちの方を中心に聞き取りました。すると、SCとの話を併せて、Kさんは両方の気持ちを話せるわけです。Kさんは、両方の気持ちがあり、それを話せる状態が出来上がることによって、元気になっていきました。通常連携というと会議が重要であることは私も同感です。一方で、このケースなどは特に会議をせず、先生方と立ち話をしたくらいでした。バランスが取れていけばいいということもあるわけです。つまり、同じ目標を持ちながら、違う役割を果たしたということです。最後、まとめになります。

SCは普通の人です。われわれは、主観に注目しています。そして、同じ目標、違う役割でということ、私としては、ぜひ申し上げておきたいと思います。以上で、私からの発表を終了します。

松浦：尾上先生の連携の方法についての話は、いい話だと思って伺いましたが、その他にいっぱい悪いこともあると思うんです。実は、SCとして困ったことを話していただいた方が、聞いている方としては、実態というものがより分かりやすくなります。現役のSCですから、できる範囲でお話しくださいませんか。

尾上：「SCを困ったら遠慮なく使ってください」と、どなたもおっしゃいますし、浸透してきていると思いますが、実際の感覚として、カウンセリングルームに来るといふことにマイナスのイメージを持つ、あるいは、そのイメージが共有されている空気を感じる場合があります。その場合、相談をすることに躊躇してしまうことも正直あると思います。

松浦：カウンセリングに対する理解というか、学校の中でSCがどのように認識されているか、これが実は非常に曖昧なんです。私も実は経験しました。カウンセリング室は作るのですが、子どもには行くなと言う教育、あるいは、行っちゃいけないというニュアンスを漂わせる教育、これは何なんだろうと今でも疑問なんです。先生はどう思いますか。

尾上：現場の感覚としては非常に核心に近い部分だと思います。逆に言うと、本当の意味で、カウンセリングルームに行く、SCに話すとか、他者に援助を求めるといふことが正しい、あるいは、非常に自立したやり方であるという認識を皆さんが持っていたら、SCに限らず、支援の体制はうまくいくという実感もございませぬ。悪意を持って、「カウンセリングルームって良くないよ」と誰も言っていないと思います。ただ、他人に頼る、他人に話す、相談するといふことが、人として非常に自立した行動である、必要な資源を有効に使っている、実に大人な、力強い考え方なのであると

いうことをみんなが声を大にしていくというところから始まると思います。

松浦：SCというのは学校にとってたぶん異物です。そして、外部の人間をどういふふうに扱ったらいいかということ、日本の教育現場は忘れていたんです。私がSCをしたときから20年も過ぎていて、もうちょっと成熟してきたかなと思ってはいたんですが、なかなか、尾上先生も困っていらっしゃるといふことを感じて、SCというのは難しい状況にいるという感じを強く持ちました。ここが解決しなければ、なかなか本来の意味でのカウンセリングはできないということです。これは、先生はどういふふうと考えられますか。

尾上：もちろん、少しずつ変わっているとは感じておりましたが、だいぶ「誰なの」といふような反応はなくなっています。実は、世代交代をだんだんしていく上で、親が学生時代にSCに助けられたという子は、最初から何の先入観もなく来てくれるんです。そういったことが進むと変わるかなと思います。

松浦：現場の尾上先生のような方が、50歳以上の方も含めて、いろんなことを教えて差し上げるということがあると、随分変わっていくんじゃないかという気がしているんです。やっぱり、子どもの認識以前に、先生方の認識が変わって、「カウンセリングに行っていよ」といふと、子どもたちも、例えば、今大きな問題である不登校についても、虐待についても、きっと、相談が恥ずかしいというよりも強く「相談してもいいんだよ」といふような勧めがあると、行くよな気がするんです。

尾上：重要なテーマだと思います。われわれは、先生方へのコンサルテーションというのが業務の中に入っていますが、それは相互コンサルテーションと言われますが、実際そのようになっていない状況があると思います。SCに頼るといふのは、いろんな選択肢の一つだから、恥ずかしくも悪くもないといふところにたどり着けるよな取り組み大事だと、先生のお話を伺って感じたところなんです。

(2) 藤田志津氏の基調報告とコメント

藤田：SSWの職務内容の説明に入ります。文科省では、SSWの活用事業実施要領を提示しています。1番から5番にまとめられていますが、本日、前半では、1番の「問題を抱える児童生徒の置かれた環境への働き掛け」について説明します。子どもにとっての環境とは、大きく分けて家庭と学校の2つになります。子どもにとってこの2つだけの環境というのは大きくて貴重なものです。ですので、家庭で嫌なことがあったり、学校で嫌なことがあったりすると、本当にこの世の終わりのように、子どもたちは悲観してしまいます。この環境の中でうまく生きていく難しさがありません。そこで、家や学校で嫌なことがあると、そこに摩擦が生じてしまいます。この摩擦を解消したり、調整したりするのを、環境へ働き掛けると言います。それでは、実際の業務の進め方を説明します。相談を受けたときに、まず大切にすることが、情報収集、問題や課題の整理です。誰が困っているのか、どのように困っているのか、どう解決していきたいと考えているのか、これがとても大事なポイントになってきます。実際の例で説明します。勤務日の数日前に教頭先生から電話をいただいて、「次に出勤するときに、生徒Aさんの不登校について相談したい」ということでした。次の勤務の時にはAさんの保護者を呼んでいるので、その保護者と面談してほしいということでした。そこで、Aさんのお母さんとの話のイメージづくりをしました。そのお母さんは困っているのか、どんなことに困っているのか、そして、先生と同じように、再登校してほしいと考えているのかなど、いろいろと考えを巡らせました。大事なことは、そのお母さんが相談したいと思って来るのか、それとも、学校から呼ばれたからくるのかです。それによって、私の面談の持ち方や目的の持ち方が変わってきます。お母さんはどんな気持ちで学校に来るのかを事前に確認しました。勤務日にAさんのお母さんとの面談が始まりました。お母さんはAさんが朝になると「おなか痛い」ということ、医者からは「おなかの風邪だろうから、お薬を出して

おきます」と言われたが、それから何日も経つのに全然良くならないこと、夜には元気になるので仮病を疑っていること、毎朝「学校に行くの？行かないの？」と子どもと言い争うのも疲れてしまったから、もう自分は放っておこうと思っていると話しました。ここでのお母さんの困り感は、「毎朝の言い争い」です。ここにすごく疲れを感じていました。また、毎朝学校に休みの連絡を入れることが、先生方に申し訳なくて、心苦しさを感じていました。お母さんの困り感は、先生が抱えている困り感とはちょっと違うわけです。このまま、先生の困り感とお母さんの困り感だけで支援方針を立てるのは危険です。Aさん本人は、もちろん困っているはずだと思います。ただ、どんなふう困っているのか、それでも頑張って登校しようとしているのかなどちょっと考えを巡らせます。そんな思いをお母さんや先生に分かってもらえないと、さらに苦しいだろうとも考えるわけです。お母さんから仮病の疑いをかけられれば、生徒本人との間にはぎくしゃくしたものが生じます。先生の方から「勉強は大事だよ。遅れちゃうよ」とアプローチされれば、それはそれで子どもとの間にぎくしゃくしたものが生じます。こういったところを調整、解消していくのがSSWの職務と考えます。ただ、先生やお母さんの困り感を軽視していいわけではなく、それぞれの困り感も解決していかなければいけません。不登校にもいろいろとあります。Bさんの場合は、「行かなくてはいけないことは分かっているけれども、何だか勉強が分からなくなってきたから行きたくないんだよね」ということです。C君の場合は、「家にいれば好きなゲームをたくさんできるから、僕は学校に行かない」ということです。この3人の例から分かるように、不登校というのは、一括りにされがちです。不登校を一括りにして、全て同じ手法で対応しようとしているところに、なかなか不登校が改善しない現状が見えているような気がします。これまで、情報収集、問題や課題の整理がとても大切だという話をしました。私たち福祉の現場では、これをアセスメントと言います。

次に、問題や課題に応じた支援計画の立案を、福祉の現場ではプランニングと言います。正確に見立てて正しく手立てを考えるという流れです。

(次に事例を用いながらSSWとしての活動と連携の様子を報告いただいた。)

まとめに入りたいと思います。学校には、子どもの問題発見機能と、家庭への支援機能があるということを先生方にはいま一度、ご理解いただきたいと思います。ちょっとした表情であったり、しぐさであったり、いつもと違うところを見つけられるのは、普段一生懸命関わっている学校の先生しかいないと感じています。福祉的な問題を多く抱えている家庭も少なくありません。福祉的な課題に対応できるのは、福祉の専門家でもあるSSWです。どうぞ、SSWにつないでいただければと思います。ただ、このスクールソーシャルワーカー事業は2008年から開始しておりますが、いまだになかなか浸透しないという感想を持っています。「実際に何をしてくれる人なんですか」と、学校現場で先生から聞かれたことがあります。まず何ができるのか、何を職務としてしなければいけないのか、SSWの専門性というところを先生方には知っていただきたいと感じております。ソーシャルワーク・フォア・スクールではなくソーシャルワーク・ウィズ・スクール、私自身はすごくしっくりくると思っています。先生方と一緒にソーシャルワークを行う、見立て、手立て、こういったプロセスを踏んで生徒への支援を開始する。この「共に行う」というところにとても重要な意味が含まれていると感じています。先生方にも、SSWと共に歩んでいただきたいと考えています。

松原：そもそも「SSWって何をやる人？」という説明から、ご苦労されていると推察します。さまざまな福祉現場で働いてきて、これは学校特有だと思うことがありましたら教えていただけますか。

藤田：今までの福祉の現場ですと、相談窓口に、皆さんは困って来てくださるんです。なので、相談意欲がとても高いんです。ただ、学校でのソーシャルワークは、先ほどのように困っていないお母さんを学校が呼んで、このお母さんを何とかしてくださいという場合があります。お母さんにどう困っていただくか、つまり相談意欲を持っていただけるかということに戸惑っています。

松原：学校は、SSWを「困っていることを何とかしてくれる人」という理解なのでしょう。ソーシャルワークでは本人がどう思っているのかを中心に進めていくという点を先生方や学校現場に理解していただく取り組みは、どんなふうに進めていますか。

藤田：教職員の先生方への研修活動というところにも力を入れていますが、漠然とした話になってしまうので、先生方がなかなか理解しづらいということがあります。ですので、日々の児童生徒さんのケースを通して、ソーシャルワークとはこういうものだ、こういう視点が大切だ、本人主体、子どもの最善の利益を考えるというのはこういうことだということを、事例を通して説明しています。

松原：福祉の現場ではない、教育の現場に入る福祉職としての立ち回りが求められていると思いました。非常に象徴的だと思ったのが、ソーシャルワークの前置詞の話です。アット (at)、フォア (for) ではなく、ウィズ (with)。うまい表現です。医療ソーシャルワークでは、ソーシャルワーク・イン・ホスピタルと、イン (in) をとっています。病院に所属しているからですが、学校ソーシャルワークは教育委員会の所属で、配置型であっても所属していないという認識が、この前置詞で明瞭になると思いました。この「ウィズ」のポイント、先生方と共に、学校と共にソーシャルワークをするときの、SSWが持つべき視点は何かでしょうか。

藤田：先生方と考え方の根本が違うので、お互いにもやもやは抱えていると思います。それは、それぞれの専門性に立脚しているということだと思います。先生方は教育的なアプローチを貫いてい

ただきたいですし、私どもは福祉的なアプローチを、SCには心理的なアプローチをそれぞれで書いていただいているのですが、それぞれを相いれないのではなくて、お互いに分かり合って、共に歩んでいければいいのではないかと思います。

(3) 総括コメント

竹田：総括的なコメントになるかどうかは分かりませんが、3点について話をしたいと思います。

第一点は、宮城県におけるSCとSSWの設置と私の関わりについてです。宮城県におけるSCの導入は、今から約30年前の平成6年のことです。当時、文部省は、SCの全国的な導入に向けて「スクールカウンセラー活用調査事業」を立ち上げました。そのとき、私は現在の大崎市立古川第一小学校の教頭をしていたのですが、その事業の研究指定校についての依頼がありました。当時は生徒指導上の課題も多く、不登校児童数も多くなりつつあったので校長と相談し、その指定を受けることにしました。2年間の指定期間でしたが、実施してきたことは本日の講師の先生方が話されたことと同じようなことです。まず、「SCとは何か」を先生方に理解してもらうことが重要でしたので、SCに学校に来ていただき、校内研修会で先生方に説明していただくことからスタートしました。次にSSWの導入についてですが、宮城県にSSWが設置されたのは平成22年の4月です。当時私は県教委の義務教育課長をしていて、平成20年に全国課長会議に参加した時のことでした。情報交換の場で、関西の方々からSSWの導入や活用の仕方について多くの発表があったのですが、私にはSSWが何かをよく理解できず、協議の中に入ることができませんでした。関西ではすでに不登校対策にSSWの活用が広く行われていたのです。その後、宮城県でも義務教育課が中心となって先進県の視察などを通してSSWについての理解を深め、平成22年度からSSWが導入されることになりました。また、SCやSSWの専門スタッフを含む「チーム学校」という言葉が生まれたのは平成27年頃のことです。その後学校教育法施行令が改正され、「SCとSSWは学校職員の一員であ

る」ということが明確に示されました。SCは「学校職員として、児童生徒の心理に関する支援に従事する」、SSWは「学校職員として、児童生徒の福祉に関する支援に従事する」と明記されたのです。先生方については「教諭は、児童生徒の教育をつかさどる」と法令で示されています。教員もSCもSSWも学校職員という同じ立場になったわけですから、共に肩を組んで子どものために協力して仕事をするというのは当たり前のことに思われるのですが、実際の連携はなかなか難しいことでした。それは、SCとSSWが嘱託という身分であることが要因の一つではないか思います。先生方とSCやSSWは、勤務時間が違いますし、SCやSSWは毎日学校に来るわけではありません。先程尾上先生が、「久しぶりに学校に行ったら浦島太郎になっていた」と話されていましたが、そういうことがネックになっているのかなと思います。

第二点は、現在の学校現場の状況についてです。現在の学校の状況ですが、いじめの認知件数は増加傾向にあります。不登校児童生徒数も増えています。最近では、貧困や虐待の問題も出ています。また、それに加え、ひとり親の家庭の増加と子どもの貧困など、新たな課題が発生しています。このような状況の中、学校だけで全てを担うのは限界があるということで、現在SCやSSWと連携しながらチーム学校として課題解決のために頑張っているわけです。先月、ある市の指導主事からこんな話を聞きました。「今日はSSWと一緒に仕事をしてきた。経済的に非常に苦しい家庭に2人で訪問し、福祉施設や行政機関との相談を勧めたり、要保護に加入する手続きを教えたり、精神的な支援などを行ってきたが、なかなかそれを受け入れてもらえず大変だった」ということでした。また、以前はこのような仕事は地域の民生委員と協力して学校の教員がやっていたのだが、今はSSWにやっていただいているので、学校現場は大変に助かっていると話していました。また、SCやSSWと連携して取り組むため、学校はどんなことに留意しているのかを聞くと、先程講師の先生方の報

告と同じでした。1つ目は、組織体制の確立と信頼関係の構築に努力しているそうです。特に、SCとSSWの役割とか、業務内容の明確化については各学校で取り組んでいて、先生方にも十分に伝えているとのことでした。当然、保護者への啓発も行われているということです。それから、「SCとSSWとのコミュニケーションが大切だ」と言われるけれども、実際には難しいということでした。そのため、ある学校の教頭先生は自分の席の隣にSCとSSWの席を置いて、常に教頭が窓口となって情報交換をしているということでした。2つ目は、SCやSSWに校内のケース会議に参加していただき助言をいただく場を多く設けているということでした。3つ目は、SCやSSWを講師とした研修会を開催し、SCやSSWの仕事内容を教職員や保護者に理解してもらう機会を設けているということでした。指導主事は、それでも連携についての取組はまだまだ足りないという考えでした。しかし、SCやSSWの活用によって、多くの事案が解決している、また解決の方向に向かっていくということで、学校現場は大変助かっているということでした。ある小学校の校長先生から「SCやSSWの方々と一緒に仕事をするを通して先生方の意識が変わった」という話をうかがいました。「困った子」から「困っている子」に認識が変わったのだそうです。それから、宮城県はとくに不登校児童生徒が多いので、不登校の子を学校に復帰させることを大きな目的として、行政と学校がその対応策に取り組んできました。その校長先生も不登校児童の学校復帰のために様々な取り組みを行ってきました。しかし、SCとの対話を通して「そればかりではないんだ」ということに気付かされたそうです。子どもの些細な変化や成長に気付いて励ましてやること、子どもの社会的自立を支援することの大切さを痛感したとのことでした。

第三点は、これからのSCやSSWの活用についてです。これも行政機関の方から聞いたことなのですが、SCやSSWの方々から学校に対して次のような要望が出ているとのことでした。1つ目は

業務内容をもう少し明確にしてほしいということ。2つ目は問題の丸投げはやめてほしいということ。3つ目は職員室に席はあるのだけれども居場所がないことだそうです。つまり、職員からもっと話し掛けてほしいということでしょうか。これらについては学校現場でしっかりと対応すべきだと思います。最後になりますが、学校とSCやSSWの役割分担を明確にすることは重要なことですが、私は役割分担に加えて「協働」ということがキーワードになるのではないかと思います。この「協働」をつくるためには、何よりも信頼関係とコミュニケーションが大切です。学校の先生方から「児童生徒の問題や保護者対応などで疲れ切っている」という話をよく聞きます。そんな時は、「あなたたちは一人じゃないんだよ」ということを話します。「SC、SSWという専門家がいるんだ。一人で抱え込まないで、一緒にやっていけば大丈夫」と応援することにはしています。今日は、教員とSC、SSWが同じ認識を持って、子どもたちの最善の利益のために頑張るといことが大切なんだということに改めて感じた研修会でした。

4. まとめ

基調報告では、SCの尾上氏とSSWの藤田氏から、学校の先生方と連携して取り組んでいる様子を具体的に報告いただき、その状況と共に、効果と必要性を確認することができた。コメンテーターの松浦先生と松原先生のコメントと質問によって現状を深掘りした時に、両氏は学校現場ではSCとSSWが今もなお異質な存在という部分があり、そのため連携・協働に苦慮している面があること、したがって学校現場において必ずしも十分に活用されていない部分があることが課題であると指摘した。以上を踏まえて総括コメントをお願いした竹田先生からは、学校現場の実状を踏まえれば、SCとSSWとの連携が必要であること、しかし、そこには学校現場の体質から今もなお連携に難しさがあること、その中で活用の努力が続けられていること、一定の成果が上がっていることが報告された。最後に、竹田先生は、チーム学

校を作っていくために、学校の先生とその他専門職の役割分担だけでなく、「協働」が必要であり、そのためには、信頼関係とコミュニケーションが大事なのではないかと指摘して締めくくって下さった。

〈あとがき〉

紙面の都合で、基調報告とコメントの一部、参加者からの質問は割愛させていただきました。